

バリ島農村の結婚事情

中谷 文美

●結婚をためらう女性たち

インドネシア、バリ島の農村で、私が二年弱にわたるフィールドワークを行ったのは一九九〇年代初めのことである。その頃二代後半だった私と同年代の女性たちのなかには、とくに結婚して子どもを育てている最中の人も大勢いる一方で、親元で機織りをしながら家計を助けたり、家事に儀礼にと常に忙しい母親の手伝いをしたりという毎日を送る独身女性も少なくなかった。

バリは、男女共に結婚し、子をもうけて初めて一人前とされる皆婚社会ではあったが、統計で見ると、インドネシアの他地域に比べ、晩婚傾向がもともと強い。とはいえ、当時の平均初婚年齢に照らしてもとくに「適齢期」を過ぎているはずの女性たちが「今はまだ結婚したくない」「結婚するのが

こわい」と口ぐちに語る様子を、かつての日本でも話題になった「結婚しないかもしれない症候群」になぞらえたことがある（参考文献①）。結婚というものにある種の憧れを抱きつつも、自分の母や姉たち、あるいは先に結婚した友人たちの結婚生活の厳しさを目のあたりにすることで、二の足を踏んでいる姿がそこにはあった。

それからすでに二〇年以上が経過し、当時、私の格好の話し相手になってくれた独身女性たちはほぼ全員が結婚し、多くはたくましい母となつて忙しい日々を送っている。この間に、結婚をめぐる通念や結婚式のやり方もずいぶん様変わりした。そこで、私が最初に長期調査をした頃とここ数年の状況を対比しつつ、バリの結婚事情の何がどう変わってきたのかを振り返ってみよう。

●結婚をめぐるしきたり

バリ社会では、結婚相手の選択にあたってさまざまなルールを考慮しなければならなかった。伝統的にもっとも望ましいとされた縁組は「父方平行イトコ婚」と呼ばれ、男女どちらにとつても自分の父方のオジの子にあたる人と結婚することを意味する。ただこれはあくまでも理想型にすぎず、実際には父方、母方どちらかのイトコや父系のつながりをたどって形成される父系親族集団内での結婚が奨励されていた。

また、父から子へと受け継がれる称号の違いに基づき、ブラフマナ、サトリア、ウエシア、スードラという四つの階層から成る位階秩序も、結婚をめぐるルールと深く結びついていた。たとえば、女性が自分よりも低い階層の男性と結婚してはならないという考え方は

により、最下層のスードラに属する女性が上の三つの階層のいずれかの男性と結婚することは認められていても、逆に一番上の階層であるブラフマナの女性がブラフマナ以外の男性と結婚することは許されなかった。つまり、上の階層に行くほど、女性の結婚相手の選択の幅は狭まることになった。

他方、制度的に認められているスードラの女性と上の階層の男性との縁組であっても、同じ階層同士のカップルにはみられないような問題が出てくる。まず、名前の問題である。バリ人には苗字というものがなかったため、日本のように結婚したからといって夫の姓を名乗ることはない。だが、上の階層の男性と結婚したスードラ女性は、もともと自分の名前の代わりに、婚家で新しい名前を与えられることになっていた。この名前の変更は、スードラの階層に生まれついていた女性が上昇婚をしたという徴ともいえる。たとえばブラフマナの家に生まれた子どもは自動的に父の称号を受け継ぎ、息子であればイダ・バグス、娘であればイダ・アユという称号に固有の名が続きシステムになっている。これに対し、スードラ出身の母は、

元の名がニ・ワヤン・アリアニだったとすると、結婚後は、上昇婚をした女性に必ずつくジェロという称号に続いて新しい個人名も与えられ、ジェロ・スガラと呼ばれるようになる、といった具合である。

このように、結婚して家族となった後も身分差が名前を通じて刻印されるほか、スードラ出身の母は、同じ階層出身の母親たちと同じようにわが子と接することはできず、一段とていねいな言葉づかいやふるまいを要求される。夫やその親族に対しても尊称を使い続けなければならない。子や孫たちの側も、母や祖母をその出身階層に応じて、異なった呼称で呼ぶようしつけられる。

さらに、バリ人は葬儀の際に、死者に向かって手を合わせ、祈りをささげる行為を特別なものと考えているが、身分が高い者が低い者に対して手を合わせることは許されないことから、上位階層に嫁出した娘の両親は、自分たちの死後、孫から祈りをささげてもらうことができない（娘は、親への負債を返すという名目で、葬儀の終りに一度だけ手を合わせる事が許される）。

●「身分がいい」の結婚もたらす波紋

こうしたことに対する反発から、私が長期調査をしていた時点では、娘の上昇婚を望まないスードラの親も多かった。ましてや娘の下降婚にあたるケース、つまり上位階層の女性が自分より下の階層、とりわけスードラの男性との結婚を望んだ場合には、両親と親族が猛反対し、その反対を押し切って結婚した娘たちは、生家から絶縁されることになった。

一九九〇年代の初頭には、村を出て都市部の学校に通う女性が少しずつ増えており、そうした就学先で知り合い、恋仲になった男性が異なる階層である可能性も高まりつつあった。同時に、階層を異にする縁組に反対する親たちの側も、より望ましい相手を探してきて結婚を強制するといった行動をとることはなかった。私が聞いたところでは、かつては親同士が決めた結婚も珍しくなかったが、意に沿わない縁組を強いられたある女性が自殺に及んで以来、そういうことはしなくなっただけだという。実際、すでに結婚していた人たちになれそめを聞くと、五〇代より下の年代の夫婦には、自分た

ちで結婚を決めたという人が多かった。従来、村の女性たちは行動範囲がさほど大きくなかったため、近隣に住み、何かと顔を合わせることの多い親族の男性とごく自然に連れ添うようになったというケースが一般的でもあった。

だが、当時結婚をためらっていた独身女性たち、とりわけ上位階層に属する娘たちは、好きな相手との結婚に夢を描く一方で、自分の出自に対する誇りをのぞかせ、生家との絶縁や自身の身分の下降という代償を払わなくてはならないような結婚に踏み切る勇氣を持てずにいたようにみえる。村内で、現実には下降婚に相当する駆け落ちが公になったときなどは、他の村人たち同様に、眉をひそめる態度が目についた。

●熟年結婚・早すぎる結婚

ところが二〇年余りが経過してみると、前述のように、当時の独身女性たちはほとんどが結婚している。同じ階層で、かつ村内に住む父系親族内の相手と定式どおり結婚した人もいれば、四〇代も後半になってから、スードラの、しかも縁もゆかりもない男性と知り合って、嫁いだ人もいる。

私が知り合った頃すでに二〇代後半だったサトリア階層の女性は、かつてスードラの男性と付き合い始めた矢先に、家族の反対を受け、別れた経験があった。この悲恋を繰り返して私に語り、どうせ結婚するなら身内よりも外国人のほうがいい、ともいつていたが、その後長い間、結婚が具体化する気配はなかった。だが、五〇歳を目前にした三年前、かなり年下のスードラ男性と突然結婚した。携帯でランダムな番号を呼び出し、たまたま通じた相手とやりとりをして、実際に会うというやり方（「ケータイ愛」と呼ばれている）で出会ったのだそうだ。

この女性と同じサトリアの屋敷にいた姪たち二人も、数年前に村外の男性と相次いで結婚し、家を出て行った。二人とも相手はスードラである。だがそのことよりも、母親が苦労して学費を捻出し、少し離れたところにある教育系の専門学校に進学させたにもかかわらず、二人共が卒業前に同級生と結婚したことに、家族はショックを受けていた。

上の娘が二六歳になっていたことを思えば、決して早い結婚とはいえないのだが、親の立場からす

れば、せっかく教員の資格が取れる学校に行かせたのに、仕事に就くことなく嫁いでしまったことが問題だった。この二人の父親は、何年にもわたって無職のままだったため、母親が市場での商売と機織りを掛け持ちするなど、身を粉にして働き、なんとか生計を立ててきた。本来なら、成人した娘たちが収入を稼ぎ、儀礼などの手伝いもしてくれることで、経済的にも時間的にもずいぶん楽になる時期がようやく訪れるはずだったからである。こうした事情をよく知る周囲の村人たちは、娘が誰と結婚したかということよりも、このタイミングでほぼ同時に結婚してしまったこととそれ自体を批判し、残された母親に同情的だった。

母親自身はとりたてて恨み言をいわなかったが、懸念していたのは、長女がまったく縁のない家に嫁いだことだった。隣村なので、距離的にはそれほど遠いわけでもない。だが、もともと行き来のない相手（バリ語では、他人という意味でアナツと呼ぶ）であるため、様子をみに訪ねていくこともままならない。次女の嫁ぎ先は、階層が違っていても遠縁にあたる家だ、その意味では心配がないのだ

という。

つまり、女性の進学率の上昇や行動範囲の拡大などにともない、「身分ちがい」の結婚は確実に増加しており、それに対する抵抗も次第に薄れているといえるが、他方、父系親族集団という限られた範囲でなくとも、なるべく近い関係にある人との結婚が望ましいとする価値観は持続しているようである。

●結婚式の形態

「誰と誰が結婚するか」という問題は、結婚式の挙げ方とも深く結びついている。結婚を正式のものとするヒンドゥー式の儀礼は数段階に分けて実施されるが、新郎新婦の双方の家族や親族が縁組に同意している場合とそうでない場合とは、プロセスが異なる。

前者は、新郎側の代理人が正式の結婚申込みを訪れる「申し込み婚」と呼ばれるもので、まず男性側の親族が妻となる女性の屋敷を非公式に訪ね、結婚の申し出をしに行く日取りを打ち合わせるところから始まる。当日は、近しい親族が男性の屋敷に集まり、まずコーヒー・紅茶と菓子でもてなされたあと、女性側の屋敷に向か

い、そこでも丁寧なもてなしを受ける。このとき男性側の父系親族の年長者が、その家の娘を妻として迎えたいという意志を男性自身の代わりに伝え、娘の父親が正式に同意を示すと、両者は女性を迎えにくる日取りを決定する。

いわゆる嫁迎えにあたる日には、男性の付き添いとして父系・母系親族も共に女性側の屋敷に向かうが、この一団は、領主家など特別な地位にない家の場合でも、ゆうに一〇〇人を越える規模になる。男性側は、丸焼きにしたニワトリ、さまざまな菓子類、供物などからなる土産を持参する。女性側の屋敷内の祭祀場で女性が祖霊に暇乞いをすませると、一同は新婦をともなつて男性側の屋敷に

戻る。

新郎新婦が実質的な夫婦となつたとみなされるのはこの日、つまり女性が男性の屋敷に来た日である。その日から数えて三日目に、「三日目の婚礼」と呼ばれる簡素な儀礼が行われる。この儀礼をすませるまでは、新婚夫婦は「穢れた」状態にあるとみなされ、行動範囲が厳しく制限されるが、「三日目の婚礼」で浄めを受けることによって、ようやく通常の生活に入れる。

女性側の家族が縁組に反対しているケースでは、「駆け落ち婚」となり、当該の男女が申し合わせで女性がこっそり屋敷を抜け出した後、二人はひとまず知人の家に身を寄せる。続いて仲裁役を任せられた第三者が、女性の両親の事後承諾を得るために向き、ここで両親が折れて承諾を与えれば、その後の儀礼は「申し込み婚」とほとんど変わりなく行われるが、頑として結婚を認めなければ、女性は生家での暇乞いの儀式を経ることなく、新郎側の屋敷だけで一連の儀礼をすませることになる。新婦は両親の怒りが解けるまで、「二度と実家の敷居をまたげない」状態に置かれる。



「嫁迎え」の日に祝いに訪れた村の友人と花嫁
(筆者撮影、2012年)

「三日目の婚礼」はあくまでも新婚夫婦の浄めが目的とされ、近親者を中心にこじんまりと行われるのがふつうである。婚礼が終わると、会食（ムギブン）が始まる。バリでは、日頃はめいめいが勝手に食事をとるのが習慣となつてい

るが、私の調査地域だったバリ東部では、婚礼の時に男性たちが特別な食事を用意し、四、五人ずつで膳を囲む。この会食が「三日目の婚礼」のしめくくりとなる。「三日目の婚礼」を経ることで結婚が正式なものとなるため、宗教的にはそれ以上の婚礼は必要ないといわれる。しかし現実には、後日改めて「大きな婚礼」と呼ばれる婚礼が執り行われることが多い。こちらの方は披露宴のような意味合いもあり、広い範囲の親族のほか、もともと付き合いのある村の人たちや、村の有力者なども招かれる。

新郎の屋敷での「大きな婚礼」が無事終わると、一同は続いて新婦の屋敷に向かう。そこでもまた、一連の儀式が繰り返され、皆が再び新郎の屋敷に戻ってきた時点で、結婚にまつわる儀式はすべて終了したことになる。

これらの儀式では、必ず婚礼用



2セットの供物が並ぶ結婚式の祭壇
(筆者撮影、2014年)

の特別な供物が用意されるが、新郎新婦に階層差がある場合は、何もかも二セット作って並べなければならぬ。二人が儀礼の終りに供物のエッセンスを吸い込む「ナタブ」という所作をした後、列席者が残った供物を共に食べることになっているのだが、新郎側の親族が、階層の低い新婦のいわば「食べ残し」にあたりとされる供物に手を付けてはならないからである。

●変わったこと、変わったこと

このような結婚式の風景にも変化がみられる。結婚式の当日には、親族や付き合いのある世帯の女性が次々に祝いの品を持って訪ねてくるが、一九九〇年代初めの

頃は、平たいお盆に米を一・五キロほど入れ、その上にビニール袋に入れた砂糖やコーヒー、そして包装紙に包んだ器セットやタオルといった実用品を持参するのが習わしだった。今も贈り物の習慣はあるが、布だけをきれいに包んで持って来たり、仕事上の付き合いで招待された人などは、封筒に現金を入れて渡す光景もみられるようになった。一九六〇年代までは、家ごとに白飯を炊き、ニワトリの丸焼きを作って、婚礼の祝いとして持参していたというから、時代と共に変化していくものなのだろう。

農村出身者同士が都市部の学校や職場で知り合い、結婚にいたる場合も、結婚式は都市ではなくそれぞれの出身地で行われることが多い。親族の立ち会いが必要とされているからだという。だが地域によって細かいしきたりは異なるため、新郎新婦の出身地が別であれば、そうした違いを織り込んだ式の挙げ方を工夫する必要も出ている。たとえば、先に紹介したような儀礼用の会食は、バリ東部の一部地域だけで今も続いている風習である。そこで、外部から新婦の親族や職場の同僚などが大量に

訪れる式では、膳を囲む形のムギブンを村人たちだけで先に済ませ、他の招待客向けの食事は、儀式の後にビュッフェ形式で供されることが増えてきた。最近私が出席した村の結婚式でも、会場となった新郎の屋敷地内に、ケータリング業者が持ち込んだ本格的なビュッフェ用のしつらいが整っていて驚かされた。その一方で、新郎新婦の階層が異なるために供物を二セット用意するやり方は、昔と変わっていないかった。

その結婚式には、私が調査を始めた頃に共に二〇代だった女性たちが客や手伝い手として大勢出席していた。「私たちもあの頃は若かったよね」と昔話に花が咲かせながら、具体的な経験は異なっても、結婚・出産・子育てというライフステージを経てきたこれまでに思いを馳せるひとときとなった。

(なかに あやみ／岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)

《参考文献》

- ① 中谷文美「二〇一三」『女の仕事のエスノグラフィ―バリ島の布・儀礼・ジェンダー』世界思想社。